★施設めぐり★

新装なった　県茶業試験場

近代的な試験研究施設

県茶業試験場がさる五月、新築落成した。これまでの試験場は、昭和八年、農事試験場茶業部から独立して現在地に県立茶業研究所として設置されて以来その建物は今日に至ってきたものだが、県産業に占める茶業の重要性を考えてこのたび全建物が新築された。

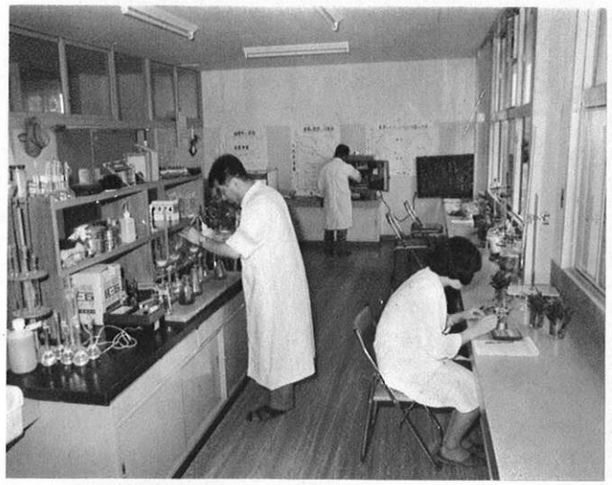
新しい試験場は大型の煎茶試験機や揉捻機などの各種近代装備が充実し、八七八アールの圃場のほか品種改良園、栽培試験園などがある。業務は、栽培部、製造部では品種改良、経営改善、省力製茶などの試験研究のほか、講習所では茶業技術者と中堅茶業者の養成に力を入れている。

（熊本市健軍町小峰二六一四　TEL　六八　二六一一）

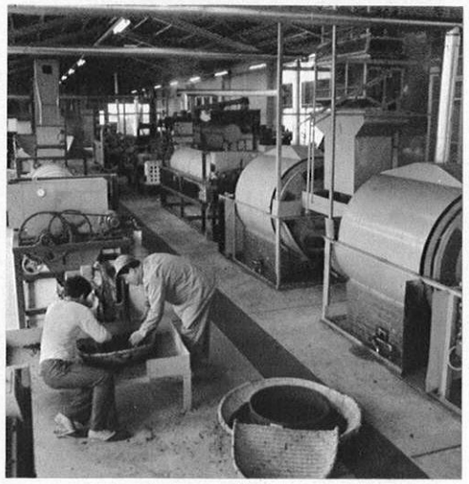
上・県茶業試験場の全景。

上・広い茶の圃場で動力摘採機が活躍する。

上・茶を細かくもむ揉捻機。



上・茶芽熟度試験研究施設も新設された。



上・製造部も大型煎茶試験機や精揉機など新鋭の施設を備えている。

＜ここに人あり＞

ある民芸資料館

★天草郡苓北町　山根敏明さん

なにしろ驚いた。古い土蔵を改装してつくられた「天草民芸資料館」の中は、ところ狭しとばかりに大小の民具が陳列されている。古くから天草に残っている生活器物、農家の片隅に見られるごくありふれた用具、それらが生きた民芸資料として整理されている。民芸品とは、長い年月の間、多くの職人や農民の手によって、ある時は農閑期の副業として、ある場合は本業として、風土につながりのある自然の材料をつかってでき上った民衆の生活用具。それなりに名もない民衆の知恵と経験の集積から生まれた日常生活に欠くことのできない実用品であり、決して、美的鑑賞を目的とした工芸品ではない。

この民芸資料館には、例えば天草地方でごく最近まで使われていたという手箱がある。ひき出しが四つある。上から、すずり箱、勘定帳簿、ソロバン、そして一番下のひき出しが藩札（お金）入れだ。いま使っても結構たのしい便利な整理箱で、これも生活から生まれたアイデアだろう。

天草の生活と民具

この〝小さな民芸館〟の館長は現在、天草水産高校で教鞭をとる山根敏明さん（四二歳）。広島県の生まれで、昭和二十四年はるばる九州、天草の最西端にある水産高校を希望して赴任してきた。東支那海に細く突き出た苓北町がいかにも海洋性に富んで見えた。山根さんの専門は魚介類の生態学。講義の面白さは生徒の間で定評がある。

ところで、余暇をみての山根さんの民具の収集は、これまた情熱的だ。現在までに収集した物件は約四百点にのぼる。その大半が、七年前から天草を中心に集めた逸品ばかり。ローカル色豊かな高浜徳利　猪口（ちょこ）水平鉢、八代船徳利、庶民のにおいがしみこんだ糸車、弁当箱、銭箱、自在かけ、天秤台、茶臼、矢立、吊りランプ等々。

〝天草の民具は、飛弾の民具のように造形な美しさはない。むしろ長崎や鹿児島から入ったようなものが同居して、いかにも素朴で稚拙〟らしい。歴史的な生活の反映らしいものを強いて求めるなら土偶や、部落の辻々にある迷信よけの石地蔵など、一様に表情が暗いのが印象的。〝その昔の天草の生活のように…〟と山根さんはつぶやくように語る。

多忙な〝収集のための休日〟

山根さんの休日はコレクションのための〝探索〟と〝発掘〟にあてがわれる。ある時は好事家を訪問して、譲りうけてもらったり、ある時はめぼしい民家の路地を彷徨したり、資金も馬鹿にならない。ボーナスをはたいてお手あげになることもしばしば。それにしても、収集にはコツがある。解体直後の民家の跡を探す。それらしい民家を訪ね、床下や蔵の中をのぞかせてもらう。寄り合いや集会などでこまめに情報を入取するなど、周囲の人びとに関心を持ってもらうことが大切だと山根さんは強調する。

〝現物〟の収集と平行して山根さんは、天草生活史の研究にも余念がない。天草生活文化研究会の仲間たちと郡内の調査に泊りがけで出かけたり、天草史談会の例会にも顔を出している。

「天草民芸資料館」はもちろん一般に公開されているので、ＰＴＡや学校関係、好事家の訪問が多い。山根さんは「民芸品の保存と活用を呼びかける」という民芸館の趣旨が生かされつつあることをひそかに喜んでいる。〝民具と天草の生活史の体系づけが最大の課題です。将来、できれば町に移館したいつもりです〟。山根さんは目下、海に関する生活用具、さしあたって大漁旗や擬餌類の収集に乗り出している。母堂と、奥さんの寿子さんの三人暮し。

民芸館を背にして立つ山根さん……★